

A CASE STUDY of CAI for OWARA DANCE

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamamoto, Hiroh, Shibata, Masaharu, Tanaka, Katsue メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/575

「おわら踊り」指導における CAI 活用の事例的研究

山本 博男・柴田 雅春・田中 克枝

A CASE STUDY of CAI for "OWARA DANCE"

Hiroh YAMAMOTO, Masaharu SHIBATA and Katsue TANAKA

I. 目的

富山県八尾町では、毎年9月1日～3日にかけて全国的にも有名な祭り「風の盆」が行われ、稲の豊作を願う「おわら」が踊られる。その優雅な踊りを一目見ようと日本及び世界各地から観光客が訪れる。おわらの歴史は古く日本を代表する伝統的な踊りのひとつである。これまで富山県内の多くの小学校、中学校で、体育授業や体育大会でおわらの指導がなされてきた。民俗舞踊を学ぶことは、単に動きを習うだけではなく、先人が築いた生活文化に触れ、暮らしの中でどのような役割を果たしてきたのかを学ぶことになる³⁴⁾。しかし、おわらなどの民俗舞踊が指導される機会は徐々に減り、現在では地元以外の地域ではほとんどなされていないのが現状である。その理由としては、おわら等の民俗舞踊を指導できる教師が不足していることがあるだろう。

パソコンの長所を教育現場に生かそうと試みの一つに CAI (Computer Assisted Instruction) がある。一般に「学習者が、①コンピュータあるいは学習端末を操作しながら、②個別に（最近ではグループの場合も含む）学習する、③教授学習システム」を指す。即ち、何らかの形でコンピュータが学習あるいは指導に関与するシステムを CAI という^{22,29)}。CAI を導入することにより学習者はパソコンを操作し自由に必要な情報を得ることができる¹⁰⁾。おわらを含めた民族舞踊や踊りの指導に関し CAI を利用した実践例はなく、従来の指導者による指導が主流である²⁷⁾。しかし、CAI は教科書や指導書が存在し

ない踊りの指導にとって、イメージを作るための有効的な教材だと考えられる^{1,5,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,25)}。加えて、最近ではパソコンの小型化が進み、持ち運びが簡易なノート型パソコンが普及している。

従って、本研究の目的は、イメージ映像や静止画などを用いた八尾町のおわら踊り指導ソフトウェアの開発と、そのソフトウェアを使用しおわら踊り指導を行い、おわら踊りへの興味・関心、技術習得や理解力を調べ、より効率的な踊り指導の方法を検討することである。

II. 方法

1. 被検者

被検者は八尾町の中学生男子新踊り初心者27名であり、実験群14名、対照群13名とした。事前アンケートを行った結果すべての被検者のおわら新踊り、パソコン操作に関して差はなかった。

2. 指導期間及び指導場所

八尾町東町公民館において4日間に渡り、毎日60分4回の指導を行った。実験群は指導者3名および、作成したソフトを利用し指導をうけた。なお、ソフトは練習時間中に自由に使用することができるようにした。対照群では、踊りの指導者3名が指導を行った。指導者は八尾町のおわら保存会東町支部青年団の踊り子男子6名であった。

3. ソフトウェアの開発

Windows98上で、Internet Explorer5.5 (Microsoft社)とMicrosoft Word2000 (Microsoft社)を使用しソフトウェアを自作した。イメージ映像は、デジタルビデオカメラ (VL-DH4000、シャープ株式会社製)で撮影した。撮影後、動画キャプチャーカード (I-O DATA社製)を利用して動画をノートパソコン (VAIO PCG-XR 1 G SONY社製)に取り込み、UleadVideo Studio3.0SE (I-O DATA社製)を使って動画を加工、動画の再生にはWindows Media Player (Microsoft社製)を使用した。

ソフトウェアの内容は「Ⅰ. おわらっちゃんけ (知識編)」と「Ⅱ. おわらを踊らんまいけ (実技編)」で構成した。知識編は「おわらの歴史」「おわらの踊り」「おわらの衣装」などについて一般図書や参考文献、先行研究を元に作成した資料を載せた。実技編は「男性の踊り」で構成され、「男性の踊りを見てみよう」と「各パートに分けて見てみよう」の2つで構成されている。「男性の踊りを見てみよう」では全体を通して見ることができ、「各パートに分けて

見てみよう」では踊りを細かく分けて見る事ができる (其の一〜其の十)。イメージ映像は八尾町のおわら保存会東町支部青年団の踊り手男子2名の衣装をまとった踊りとした。

静止画や踊りの注意点などのコメントは動画のモデルとなった男子踊り手2名と相談して実際に指導している内容を載せた。ソフトの操作については、マウスを使って画面上の矢印を移動させ、ボタンをクリックするとその項目が表示されるウインドウクリック形式とした(図1)。

4. 分析方法

本研究では、おわらの新踊りやその指導法に対する興味・関心、踊りの技術・理解度を実験の前後で比較検討した。実験前におわらの新踊りについて知識や興味・関心、指導経験、パソコンの利用経験などを問う事前アンケートを実施し、練習をすべて終えた時点で、踊りや指導方法に対する興味関心や踊りの技術について事後アンケートを実施した。踊りの技術に関して、踊りの評価が難しいため、自分の踊りと指導者のアドバイスから自己判断してもらった。



図1 おわら踊り指導ソフト

III. 結果及び考察

1. おわら新踊りに対する興味・関心について

事前アンケート「あなたは新踊りに興味がありますか」の質問と事後アンケート「あなたはおわらの新踊りに興味をもちましたか」の質問を比較してみると、実験群は、事前アンケートでは「ある13名」「ない0名」「どちらでもない1名」のに対し、事後アンケートの結果は、「もった13名」「もたなかった1名」「どちらともいえない0名」であった。(図2)

対照群は事前アンケート「あなたは新踊りに興味がありますか」の質問では「ある12名」「ない0名」「どちらでもない1名」であったのに対して、事後アンケート「あなたはおわらの新踊りに興味をもちましたか」の質問に対し、「もった9名」「もたなかった1名」「どちらともいえない0名」であった。(図3)

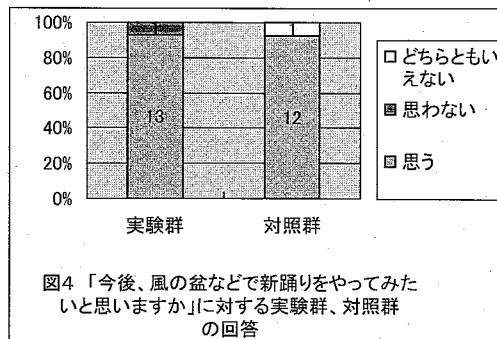
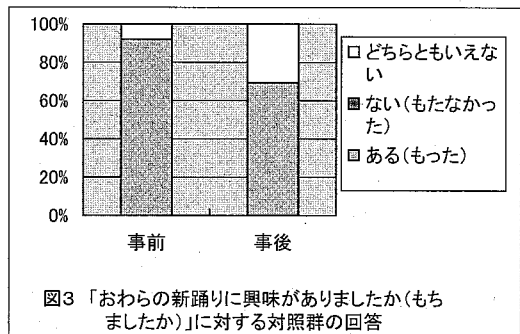
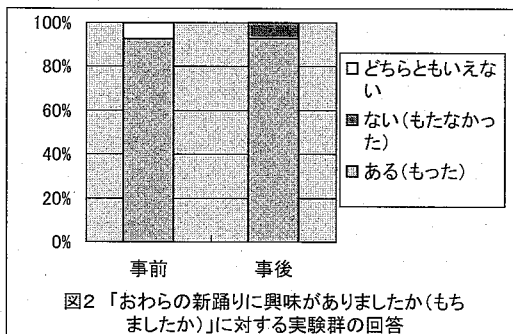
両群に有意差は認められなかった。実験群の多くの被検者が練習後に新踊りに対して興味を持ったと考えることができる。

「今後、風の盆で新踊りをやってみたいと思いますか」の質問に対し、実験群、対照群ともにほぼすべての被検者が「思う」と答えた(図4)。「思う」と答えた主な理由は、「新踊りそのものが楽しかったから」「旧踊りだけでなく新踊りもやってみたいから」「興味を持ったから」「パソコンソフトを用いた練習は楽しいから」であるのに対して「思わない」と答えた理由は「旧踊りだけで十分だから」であった。

事後アンケートで実験群・対照群のほとんど全ての被検者が、今後、風の盆で新踊りを踊ってみたいと回答していることから、新踊りの指導を通して、新踊りの奥深さ、難しさを実感し、より一層踊りに対する探求心が生まれたように思われる。また、今後も新踊りを練習していくと推察できる。

2. おわら新踊り技術習得について

事後アンケート「自分の踊りのできばえがよくわかりましたか」の質問に対し、実験群は「よくわかった7名」「わかった4名」「どちらとも



いえない3名」「よくわからなかった0名」「わからなかった0名」と回答し、対照群は「よくわかった11名」「わかった2名」「どちらともいえない0名」「よくわからなかった0名」「わからなかった0名」と回答した。(図5)

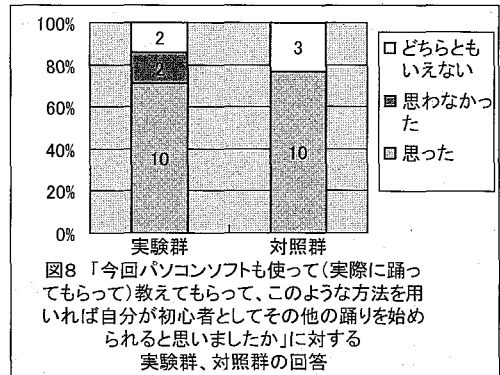
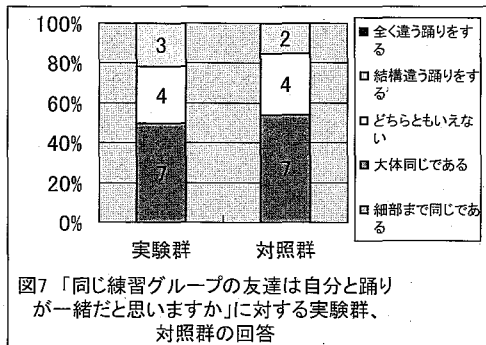
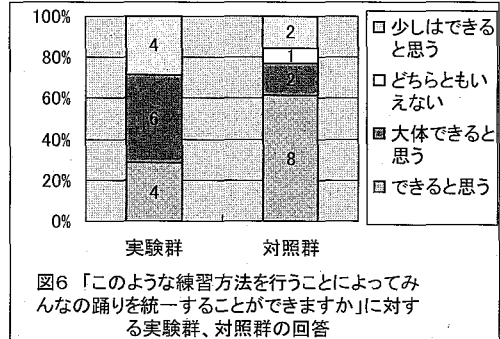
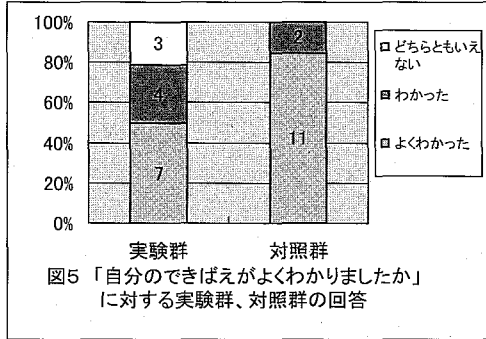
事後アンケートにおいて「このような練習方法を行うことによって指先や足先の動かし方などを統一することができますか」との質問に対し、実験群は「できると思う4名」「大体できると思う6名」「どちらともいえない0名」「少しはできると思う4名」「ほとんど無理だと思ふ0名」「できない0名」と回答し、対照群は「できると思う8名」「だいたいできると思う2名」「どちらともいえない1名」「少しはできると思う2名」「ほとんど無理だと思ふ0名」「できない0名」と回答した。(図6)

事後アンケートにおいて「同じ練習グループの友達は自分と踊り(指先や足先の動かし方)が一緒だと思いますか」との質問に対し、実験群

は「細部まで同じである0名」「大体同じである7名」「どちらともいえない4名」「結構違う踊りをする3名」「全く違う踊りをする0名」と回答し、対照群は「細部まで同じである0名」「大体同じである7名」「どちらともいえない4名」「結構違う踊りをする2名」「全く違う踊りをする0名」と回答した。(図7)

技術習得に関するアンケート項目において両群間に有意差はなかった。踊りの統一性に関し、「大体同じである」の意見が両群ともに半数を占めていたが、「結構違う踊りをする」との回答が2割ほどあった。

指導者は学習者の踊りを見て細かく指導できるので踊りの統一に適していると思われる。しかし、パソコンを利用した場合、踊りの技術指導を個人に対して行うことはできても、フィードバックによる情報提供ができないといえよう。



3. パソコンを利用した指導ソフト又は踊りの指導者の指導内容について

(1) 共通の項目

事後アンケートにおいて、「このような練習方法を用いれば、自分が初心者としてその他の踊りを始められると思われましたか」の質問に対し、実験群は「思った10名」「思わなかった2名」「どちらともいえない2名」、対照群は始められると「思った10名」「思わなかった0名」「どちらともいえない3名」であり、両群間に有意差はなかった。(図8) その理由を複数回答形式で質問してみると、実験群では、「自分の分からない動きを繰り返し見られるから9名」「自分のペースで練習できるから8名」「動画や静止画で踊りのイメージが作れるから8名」であり、対照群の理由としては「実際に踊りを見て踊りのイメージが作れるから9名」、「自分の分からない動きを繰り返し聞けるから8名」との意見が多かった。

4. 実験群の項目

ここではパソコンを利用した実験群のみにある質問項目の結果をあげる。

事後アンケート「パソコンを利用した指導ソフトがあれば踊りが踊れる人は必要ないと思

ますか」の質問に対し、「必要ない0名」「必要である14名」「どちらともいえない0名」と全員パソコンソフトがあっても、実際に踊りを教えてくれる人がいた方が良く答えている。

また、「パソコンを利用した指導ソフトを使うよりも踊れる人に直接教えてもらった方が良く分かりますか」の質問に対し、「踊れる人に教えてもらった方が良く分かる6名」「パソコンを利用した指導ソフトを使った方が良く分かる3名」「踊れる人とパソコンを利用した指導ソフトの両方があればよくわかる5名」「どちらともいえない0名」であった。(図9)

「練習中にパソコンソフトの動画又は静止画(踊りのポイントを含む)を繰り返し見ましたか」の質問に対し、「毎回繰り返し見えた9名」「一度しか見なかったことが多い3名」「ほとんど見なかった1名」「1度も見なかった0名」であり、その理由は「自分の踊りと比べるため」「わかりやすいから」「やる気・見る気がなかった」であった。(図10)

「パソコンソフトの動画又は静止画は参考になりましたか」の質問に対し、「とても参考になった6名」「参考になった6名」「参考にならなかった1名」「全く参考にならなかった0名」

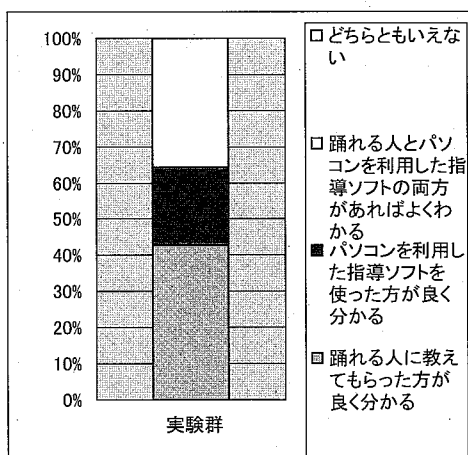


図9 「パソコンを利用した指導ソフトを使うよりも踊れる人に直接教えてもらったほうが良く分かりますか」に対する実験群の回答

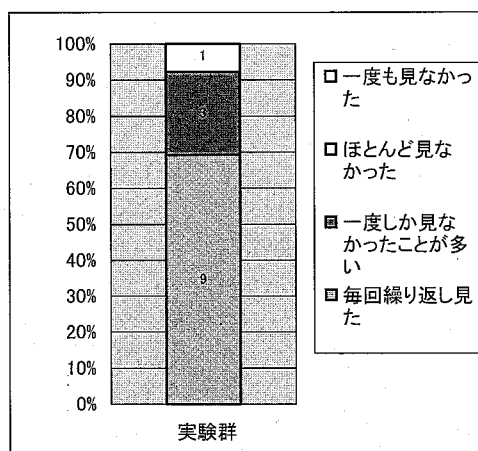


図10 「練習中にパソコンソフトの動画又は静止画を繰り返し見ましたか」に対する実験群の回答

「どちらともいえない1名」と回答した(図10)。

半数以上の被検者が繰り返し利用し、その多くが参考になったと回答していることから、被検者は動画や静止画に対して肯定的であったと思われる。

参考になったという理由は、「パソコンソフトがわかりやすかったから」「自分の踊りと違いがわかるから」であり、参考にならなかったという理由としては「パソコンソフトを見てない」というものであった。(図11)

「おわらの踊りの練習で指導ソフトを使ってみていただけますか」の質問に対し、「思う7名」「思わない2名」「どちらともいえない0名」であった(図12)。その理由をたずねた結果、「人に聞いた方が早い5名」「わからないところを繰り返し見ることができる4名」「イメージ作りに最適3名」「わからないときにすぐ見ることができるから2名」という回答があった。

おわら踊り指導ソフトを使ってみての感想としては「簡単でわかりやすかった」「よくわかった」「まあまあよい」「あまり使ってないからわからない」などの意見があった。

「パソコンソフトの良い点はどこだと思いますか」の質問(複数回答可)に対し、「いつでも見たいときに踊りが見ることができ

るから13名」「いつも同じ踊りを見ることができるから12名」が多かった。

「パソコンソフトで足りないと思ったこと、また、パソコンソフトに入れてほしい内容は何か」の質問(複数回答可)に対し、「動画や写真をもっと大きくしてほしい11名」「手首とか足先の動画が見たい10名」「もっと細かくポイントを指摘してほしい9名」などの回答が多かった。また、「指先の動きがわかりにくい」「文章ではうまく伝わらない」などといった意見があったことから、指導ソフトを改善する必要があると思われる。

全員の被検者がパソコンのみの指導は困難であると回答しているように、パソコンを利用した指導は「いつでも見たいときに踊りを見ることができる」「いつも同じ踊りを見ることができる」「すぐに見たい振り付けを見ることができる」など指導者による指導の支援、即ち、アシストする役割を果たすことができるであろう。

IV. 結論

本研究の結論は以下のとおりである。

1. おわら新踊り指導においてパソコンを利用した指導法と、従来通りの指導者のみによる指導法では男子中学生おわらの踊り手の

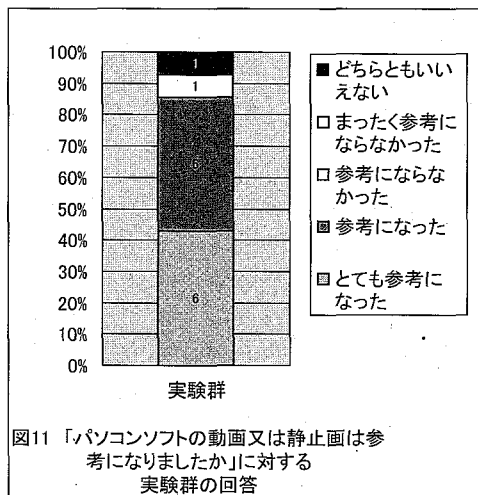


図11 「パソコンソフトの動画又は静止画は参考になりましたか」に対する実験群の回答

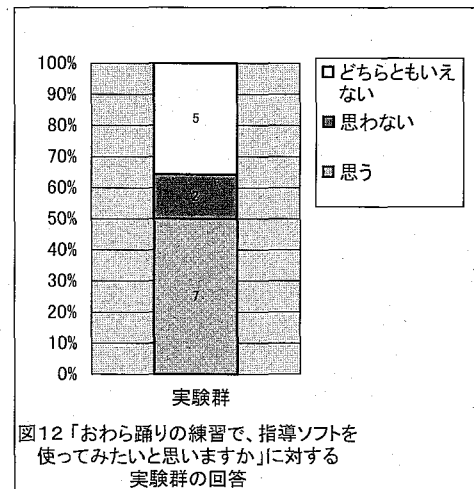


図12 「おわら踊りの練習で、指導ソフトを使ってみていただけますか」に対する実験群の回答

おわら踊りに対する対する興味・関心に有意差はなかった。

2. おわら踊りの技術指導においてパソコンを利用した指導と、指導者のみによる指導に有意差はなかった。
3. 今回作成したおわら踊り指導ソフトは指導の支援、即ちアシストの役割を果たす可能性が考えられる。

V. 今後の課題

1. 踊りの細かい部分に焦点を当てたソフト内容の作成が望まれる。
2. 本実験ではパソコンは一台で指導を行ったが、パソコンの台数を増やし実験を行うことが必要である。

【参考文献】

- 1) 塚本正秋 (1994) 「パソコンに対する中学生の意識調査」 島根大学教育学部紀要 28 79～86
- 2) 里見まり子 (1991) 「舞踊教育における指導法について」 女子体育 25 95～110
- 3) 進藤貴美子 (1995) 「民俗舞踊を学ぶ意味」 体育学研究 4～7
- 4) 佐藤雅子 (1995) 「郷土芸能を授業に取り入れること」 体育学研究 8～11
- 5) 古和悟 (1994) 「体育授業のためのパソコン操作術」 体育科教育 9 27～30
- 6) 赤堀侃司 (1988) 「コンピュータと子供の未来」 岩波文庫 47～50
- 7) 神里志穂子 (2000) 「舞踊における手指軌道の運動特性と主観的印象の関係」 映像情報メディア学会 [編] 24 (38) 47～51
- 8) コンピュータ教育開発センター (1995) 「初等中等教育におけるコンピュータの効果的な活用」 教育と情報 444 (3) 38～43
- 9) 安西正浩 (1995) 「マルチメディア教材の開発支援」 教育と情報 453 (12) 30～33
- 10) 鈴木勢津子 (1995) 「マルチメディアを考える」 教育と情報 445 (1) 32～35
- 11) 八倉巻敬子 (1991) 「越中八尾おわら風の盆にみる衣装」 富山女子短期大学研究紀要
- 12) 成瀬昌示 (1991) 「～風の盆～おわら案内記～」 言叢社
- 13) 入江友生 (1994) 「陸上競技の授業」 体育科教育 9 45～47
- 14) 賀川昌明 (1994) 「学校体育におけるパソコンの利用」 体育科教育 9 20～22
- 15) 苅宿俊文 (1993) 「コンピュータ導入の課題」 現代教育科学36 (10) 60～62
- 16) 佐伯胖 (1994) 「体育とコンピュータ」 体育科教育 9 10～13
- 17) 柴橋大一郎 (1990) 「実体験を補うメディアとしてのコンピュータ」 教育と情報379 (10) 24～26
- 18) 園下昌久 (1998) 「パソコンで技能を調べるハンドボールの授業」 SPASS 8 33～39
- 19) 杉山照美 (1996) 「パソコンを使った陸上競技の授業」 体育科教育952～55
- 20) 祐川猛 (1995) 「パソコンは跳び箱運動の先生だ！」 教育と情報445 (4) 36～41
- 21) 染岡慎一 (1990) 「マルチメディア CAI システムに関する研究」 99～108
- 22) 井川浩一 (1994) 「バレーボールの授業 (中学校)」 体育科教育941～43457 (4)
- 23) 鈴木一郎 (1991) 「自作学習ソフトの特徴とその現状」 教育と情報 457 (4) 44～45
- 24) 塚本栄一郎 (1991) 「パソコンに対する中学生の意識調査」 島根大学教育学部紀要2879～86
- 25) 横田耕治 (1994) 「スポーツの世界を変えるコンピュータ」 体育科教育914～16
- 26) 吉田貞介 (1996) 「教育現場でのコンピュータの効果的な使い方」 パソコン活用大百科 107～111
- 27) 國枝タカ子 (1985) 「舞踊教育における VTR 教材の開発」 茨城大学教育学部紀要3471～86
- 28) 芦葉浪久 (1991) 「コンピュータ教育のススメ」 アスキー出版68～168
- 29) 栗山文男 (1996) 「マルチメディアと CAI」 警察学論集49115～125
- 30) 赤堀侃司 (1993) 「学習教育とコンピュータ」

日本放送協会80～87

- 31) 赤堀侃司 (1992) 「コースウェア様式ごとにみる効果的なコンピュータ利用②」教育と情報 41036～37
- 32) 赤堀侃司 (1992) 「コースウェア様式ごとにみる効果的なコンピュータ利用③」教育と情報 41134～35
- 33) 赤堀侃司 (1992) 「コースウェア様式ごとにみる効果的なコンピュータ利用④」教育と情報 41234～35
- 34) 赤堀侃司 (1992) 「コースウェア様式ごとにみる効果的なコンピュータ利用⑤」教育と情報 41334～35
- 35) 井川浩一 (1994) 「パソコンを使った体育授業の実践例：バレーボールの授業」体育教育941～44
- 36) 赤堀侃司 (1993) 「学校教育とコンピュータ」日本放送協会10～25
- 37) 赤堀侃司 (1993) 「学校教育とコンピュータ」日本放送協会80～87
- 38) 赤堀侃司 (1993) 「学校教育とコンピュータ」日本放送協会132～155